

# 我、鉄路を拓かん 第二回

梶よう子

## 第二章 新たな時代へ

一

坂道を転がる石は止まることを知らず、さらに速さを増していく。品川では英国公使館が焼き討ちに遭い、その翌文久三年（一八六三）三月、將軍家茂が老中をはじめ、供を三千人引き連れて上洛した。三代將軍家光から約二百年振りの京入りだ。腰を抜かしたのは、徳川家から京の庶民に六万三千両の金子が振る舞われたことだった。

手代の常吉は、瓦版を見ながら、  
「まだまだお上は銭があるんですねえ」

と感心していたが、家光の頃の例に倣ったの金子のばら撒きは、幕府にとっては痛し痒しだ。先年、薩摩藩の起こした生麦村での英吉利人殺傷事件の賠償金も求められている。華美な行列でなくと

も、三千人の家臣が随行したのだ。その掛かりはいかほどか。ともあれ公武合体を盤石なものにするためには必要な費えと諦めるしかなかっただろう。

京におわす天朝さまは、いまだに異国を排斥したいというお考えらしい。開いた港を今更閉じるわけにもいかないが、お上はどのような決断をするのか。

七月には、生麦の事件に端を発し、とうとう薩摩島津家と英吉利国が衝突した。あときは、薩州屋敷も騒ぎになったが、横浜はさらに大混乱だった。駐屯している英吉利国の兵士はもとより、仏蘭西軍や居留地の異人までが銃を取った。その報復のため、薩摩は神奈川宿にまで迫ったというから恐ろしい。後日、懇意にしている薩摩藩の作事方、伊集院吉左衛門から聞いた話では、久光一行は、異人の襲撃を恐れ、その先の程ヶ谷宿まで逃げるように足を延ばしたが、本陣には泊まらなかつたという。ここで戦になるかもしれないと家臣たちは一睡もしなかつたらしい。

しかし、結局は国許の薩摩で戦になってしまった。その報は江戸にもすぐさま伝えられた。英吉利国の軍艦を沈め、撤退まで追い込んだと知ったときには、森田屋と、出雲屋の跡を継いだ倅とともに、酒樽を薩州屋敷へ届けた。江戸では異人を脅威と感じ、お上の開国を快く思っていない庶民も多い。そうした者たちは薩摩藩に快哉を

叫んでいた。

攘夷、尊王、開国、公武合体……聞き慣れない言葉がすっかり蔓延はびこって、庶民の会話の中にも出てくるようになった。どこぞのお武家の息子さんは攘夷志士だとか、天朝を敬う尊王だとかそんな具合だ。そういえば、神奈川宿の料理屋に呼んだ芸妓げいぎが幕府の役人と異人のお偉方えらがたの座敷で、「異人にあたしの三味線しやみせんはわからない」とつつばねてから、攘夷芸者ともてはやされていると聞いていた。

とはいえ、横浜にいる者たちは異人相手に金儲けかねもうしている。嫌だいや、嫌いだといっても、横浜商人は生糸きいとや茶などで富を得ている。武家にしても、異国の武器を内緒で買い求めているという話もあった。異人を嫌いながら、異人を利用する。その矛盾むじゆんに皆気づいているのに気づかないふりをしている。

かつて異国は怖い、異人は恐ろしいと思っていたやいち弥市やいちだったが、横浜に幾度も足を運ぶうち次第に見方が変わった。港崎遊郭みやざきゆうかく、岩亀がんき楼ろうの女郎じやろうあげはおかげともいえる。

姿なりも形かたちも我が国の民たみとはまったく異なり、話し言葉もまったく違うが、

「異人も日本人も変わりはありません。みんな同じ人、だと聞きました」

そうだった。

異人と寝る妓たちは恐ろしくないのか、と床の中で訊ねたら、そう返して来たのだ。

岩亀楼は、異人と日本人は遊ぶ棟が分かれている。遊女も別だ。異人相手の遊女は羅紗緬と呼ばれる。あげははそうではないが、遊女同士の間では異人の客の話は当然のように出てくるし、あげはも異人から声をかけられたことがあるといった。客は、若い船乗りや兵士、居留地に住む裕福な商人や役人もいるという。気さくで優しい人もいるが、乱暴で怖い人もいる、日本の男もそうでしょう、とあっさり答えた。

「でも言葉がわからないと不安じゃねえのか」  
さらに訊ねると、

「わたちの姐さんは異人相手だけど、あのとときにべらべらおしゃべりしないと笑っていたでござんすよ。異人さんは甘い珍しいお菓子や、洋傘とか羽根つき帽子を贈ってくれるから、わたちたちもそのおこぼれにあずかっておりますよ。もともと、わたちたちは傘をさして、町を歩けやしないけれど」

あげはは、くすくす笑った。

「日本のお客で面倒なのは、自分は攘夷志士と意気がって揚がってくるお武家。異人相手の妓をまるで仇のように罵って。前に、港ばかりか、股も開くのかって。うまいこといったつもりで悦に入

ているから、月の物がきたと嘘うそをいって追い返しちまいました」

けれど、羅紗緬めんようというのは、侮蔑ぶべつの言葉だと眼を伏せた。羅紗緬は綿羊の別称だ。長い航海をしている水夫たちが、食用として乗せている羊で欲を満たしたといわれているところから、異人相手の女郎たちをそう呼ぶのだという。なんとも下卑げびた話だ。

自国の女を貶おとしめて、こうした可哀想な女を作らざるを得なかったのは、開国のせいだと思わせたい誰かがいい出したのだろう。

攘夷芸者も似たようなものだ。異人に啖呵たんかを切る女を褒め称たたえているのだ。

弥市は、隣で横たわるあげはの話聞きながら、自分が遊郭を造るための地固めをしたとは話せなかった。女たちを人身御供ひとみごくうにする片棒を担かついでいるような気がしたからだ。

「わっちの家は漁師でね、ここを造るからって潰つぶされちまった。でもこうして新しい町が出来て、お金が回って、わっちたちも、親もわっちの身売り金で食い繋つないでる。それは悪いことではないでござんしょう？ 政まつじとは縁えんもゆかりもないけれど、異人と仲良くしている姐さんたちを、幕府のお役人たちは褒めてあげてもいいと思うけれど」

なるほど、と弥市は笑った。

「外国奉行さまから、礼を言われてもいいぐらいだな」

「ああ、そうですね。それがまことになったなら、わっちらもちよっと胸が張れるかもしれんせん」

弥市はこの頃、薩州屋敷に赴おもむいていなかった。小さな修繕仕事が多く、人足にんぞくも数十人で事足りるから常吉ひとりで十分差配さはい出来る。少し大きな仕事をやらせたいが、世が騒がしいからか、請け負い仕事は目に見えて減っている。ただ、常吉の話では、英吉利国との戦以降、屋敷内が以前にも増してピリピリしているらしい。気にかかっていたところで、出入りの職人には内情など洩もらすことはない。京の都で攘夷志士が連日、暗殺されているとか、流れてくる話は物騒ぶつそうなものばかりだ。少し前、京の都を火の海にした長州毛利家は天子てんしさまの怒りを買って、幕府による討伐とうばつを受けた。

焼けた京の都は、これから普請ふしんが続くのだろうと、不謹慎ふきんしんなことを考えた自分があさましい。土工どこう以外の商いあきなでは、炭問屋、温泉問屋ともに利を得ており、長屋の家賃収入など、細かなものも含めれば、暮らしにさほど影響はない。

父を送り、子まで送った。あとは、残った子の祝言しゆげんだの、孫の誕生など、先々の人生の余裕を感じはじめたせいかな、この頃は、茶の湯や狂歌に親しんだ。家族を連れて、花見を楽しめるだけ、江戸の町の平穩へいおんを感じていた。

慶応二年（一八六六）の神無月も半ばを過ぎた。

弥市は、この日、森田屋藤助と出雲屋の倅とともに、恵比寿講を開いた。恵比寿講は恵比寿神を据え、鯛を供える商家の祭りだ。商売の安泰と繁盛を祈る。

大工や左官、鍛冶、石工など普請にかかわる職にある者たちは、別に太子講がある。聖徳太子の絵姿を描いた軸を下げ、宴席を張る。恵比寿が商売の神様であるように、聖徳太子は大工の神様だ。寺院を多く造ったということもあるが、いまの清国のずっと昔にあった隋国から、曲尺という物差しを取り寄せたのが太子だったという言い伝えがある。

太子講では、付き合いのある棟梁から招かれるが、今日は招く側だ。朝から魚屋、青物屋、酒屋、仕出し屋で勝手口はごった返し、家の者も奉公人、常雇いの人夫も数人呼んで、宴席を整える。

付き合いの深い万屋の隠居、富右衛門、尾張屋、松山屋敷、薩州屋敷の出入りの職人たち。中でも薩州出入りの大工、安達屋久治郎は歳も近く気が合う男だった。それから清水屋喜助を招いた。

清水屋は神田新石町に店を持つ大工の棟梁だ。先代の喜助の頃から幕府の御用を務め、横浜開港の折には、いち早く普請を請け負った。横浜という寒村に新たな町が、しかも異人船が出入航する湊町

と居留地も造られるとなれば、普請景氣に沸くと睨んだのだ。

弥市は、横浜居留地の普請の際に清水屋と知り合い、その横浜店を訪れ、先代と、喜助襲名以前の清七とは幾度も酒を酌み交わした。

開港直前の安政六年（一八五九）五月、江戸から横浜へ向かう駕籠の中で先代喜助が頓死。娘婿であった清七が二代目喜助を襲い、その披露の際には祝いに駆けつけた。

清水屋の当主となった喜助は、先代以上に横浜にかかわり、異人の建築師のもとで働き、西洋の建築技術の研鑽を積み、今は西洋屋敷の絵図面を引けるほどになっているという。

いまは江戸に戻っていることを知り、恵比寿講に招いたのだ。会うのは久しぶりだった。商売も含め色々積もる話も出来るだろうと思つた。

朝五ツ（午前八時頃）の鐘が鳴り響いてからしばらく経つと、まづ松山屋敷から柴田才治郎が顔を見せた。薩州屋敷の伊集院にも声を掛けたが、島津家はやはり多忙な様子だ。

あらかた顔が揃つて、宴になった。子どもには菓子、奉公人や人には酒肴を振る舞う。

柴田は、少しだけ酒を呑み、半刻（約一時間）ほどで帰って行った。

皆、酒が入って、次第に声が高くなる。



と、清水屋が、刺身を摘み上げた拍子に、皿に眼をとめた。

「おや、これは伊万里じゃないか」

「ええ、横浜の嘉兵衛さんの店で買った大皿ですよ」と、弥市は応えた。

「なあんだ。で、その嘉兵衛さんはどうしたい？ 伝馬町の牢屋敷

から寄場に送られてから噂を聞かぬえし、ちよいと心配なんだが」

太い眉をひそめた。

「寄場送りになった知り合いがいるのかい？」と、尾張屋が薄い唇をへの字に曲げた。

首を傾げる万屋には、「ほら、三十間堀の嘉兵衛さんですよ」と告げた。

ああ、材木商の、と尾張屋が膝を打ち、店を畳んで横浜で別の商いを始めたと聞いたが、寄場送りになっていたとは穏やかじゃないね、と腕を組んだ。

「そうなんですけどね。昨年、横浜に戻ったんですよ」

嘉兵衛は三十間堀で父親の跡を継ぎ、材木業を営んでいた。

安政二年（一八五五）の大地震で、肥前佐賀鍋島家の屋敷修繕に材木を入れたことから懇意になり、横浜開港にあたり、鍋島家から陶磁器の店を出してはどうかと持ちかけられたのだ。実はかなりの借金があったため、心機一転とばかりに材木屋をあっさり辞めて、

横浜に移り住み、佐賀の陶磁器を扱う店を開いた。佐賀藩には焼き  
窯がまが多くあり、特に良質な伊万里焼きを異国に売り捌さばきたかったの  
だろう。嘉兵衛は異国の商館相手に実直な商いをしてしたが、借金  
返済を焦あせったあまり、異人と手を組み、金貨密売に手を染めた。あ  
つという間に儲けが出て、借金はさっぱりなくなったものの、生来、  
根が真面目まじめな嘉兵衛は発覚直前に奉行所に出頭し、入牢。なんと、  
お沙汰さたが出る昨年まで伝馬町と寄場で五年もの間を過ごした。遠島えんとう  
を覚悟していたところを、江戸お構いですが、江戸からの追放  
刑のため三十間堀の家に戻ることは叶かなわず、結局横浜に戻ったのだ。  
「陶磁器の店は別の者に乗っ取られてしまったようですが、高島屋たかしまや  
嘉右衛門かえもんと改名して、今はまた、材木業に戻ったようです」

五年の間ですっかり様変わりした横浜を見て驚いたものの、まだ  
まだ普請景気に沸くと踏んだのだ。もともとが材木を扱っていただけに、  
昔の伝手つてを頼り、異人の知人も利用しながらうまくやっているら  
い。

「横浜の入札いれふだにはまだ顔を出していないようだが、そのうち声をか  
けてみよう。けど、弥市さん、いやに、詳しいね。会ってたのかい？」

清水屋しみずやが 盃さかずきを傾けつつ、弥市を見る。

まあ、港崎でちよいと、と言葉を濁にごし、隣の座敷で子どもらや奉  
公人の世話をしている女房とみの富うかがを窺うかがった。

「なんだ、水臭え。みずくせおれも誘つてくれりや、馳せ参じたものを」  
ははは、と清水屋が笑う。

「実は、今日の恵比寿講に誘ったんですがね、江戸お構いだからと真面目に断られちましたよ。商売の切り替えは早いたちが、性質は変わらず馬鹿正直というか。若いなになあ、まだ三十五ですよ」

弥市は、清水屋の盃を満たしながら、いった。

江戸お構いは、本来市中に立ち入ることが許されないが、草鞋わらじを履いていけば、旅の途中、商売の途中とみなされる。家族と離れ離れになってしまった者など、そうして、会いに来ることが出来た。厳しい沙汰だが、お上も粹いきなはからいをする。

八ツや（午後二時頃）には、皆、すっかり出来上がり、森田屋は義太夫だゆうを唸り始め、万屋は、娘のお仲なかに縁談を持ってくると迫った。お仲は十五。そろそろ婿探しをしてもいい歳頃だと弥市も思っているが、当のお仲にその気がない。鼓つづみに長唄ながうた、太鼓たいこの稽古けいこが楽しくて仕方ないらしい。

だったら、長唄を聴かせてくれと、万屋がしつこくいうのを出雲屋と尾張屋が止めた。

そのうち、呑み過ぎた万屋がいびきをかいて眠ってしまい、森田屋と清水屋は、跡を継いだばかりの出雲屋の相談を受けていた。やはり、この頃は小さな仕事しか入って来ないとこぼしている。

それは他の棟梁たちも同様だ。

「なあ、弥市さん。これだけ、世が乱れちゃ新しい物なんぞ造ろうって気には誰だつてなりやあしねえよ。お上が急に亡くなって、長州征伐も、なし崩し的に手打ちになったのは、情けないがな。けど、天朝さんが攘夷をしろって騒いでいるのに異国は次々入ってくるから、公儀の立つ背はまったくねえ。清水屋さんはお上の御用も受けているし、横浜とも縁が深いから、耳にしているだろうが、幕府の小栗某おぐりなにがしつてお偉いさんが、仏蘭西国から金を借りて、武器を買うとか、なんだとか。これから造るのは小銃しょうじゆうだの火炮かほうだのつてことになりや、鍛冶屋の出番だな、ははは」

笑い事ではないだろう、と弥市は思ったが、あながち間違いとは言い切れない。

と、急に尾張屋が声を落とした。

「弥市さんは薩州屋敷のお出入りだ。長州と薩摩が手を組んだつてのは、本当のことかい？」

は？ と唐突とうとつな言葉に弥市は眼を見開く。聞いたこともない。そんな話をどうして尾張屋が知っているのかも不思議だった。しかし、尾張屋のように、幕府御用の入札に参加し、豪商との付き合いもある棟梁は耳が早い。噂うわさでも風聞ふうぶんでもいち早く手に入れる。

そういえば——いつだったか、伊集院が珍しく家中のことを洩ら

したことがあった。

英吉利国と戦になって、攘夷の風がちつとばかり収まっているという。

自分はまだ異人が嫌いだといっていたが、異国の強さを知ったから、付き合うのも悪くはないと、国許の者たちは感じているらしいと話した。

それが長州との話に繋がるかはわからないが、数年前に長州も下関に英吉利国、仏蘭西国などがやって来て戦になった。互いに異国の武力を見せつけられた同士で手を結ぶ――。

いやいや、京都を焼いた長州を、容赦なく叩いたのは薩摩ではないか。待てよ、二度目の長州征伐のとき、薩摩は兵を出さなかったと聞いた。

將軍急逝の事情はあれど、幕府は、長州藩ひとつ討ち取ることが叶わなかったのだ。それはもう、幕府の権威が墜ちたということに他ならない。

もし尾張屋がいうように、長州と薩摩が手を組んだとしたら、この先、何が起こるのか、弥市はぶるっと身を震わせた。

「考えてみれば、いまは將軍さまがいなくてことだ。おそろく一橋家の慶喜公が次の將軍さまになるだろうが、これまで、お武家の棟梁がいらないなんて、徳川の世になってから、この二百五十年の間

にあつたかね。それだけ、世がぐちゃぐちゃだつてことだろうよ。まったく、どうなつちまうのか。世が壊れちまうかもしれないねえよ、弥市さん。どうしたらいいんだろうねえ」

酔よいが回つてきたのか、尾張屋はいつもの陰のある眼ではなく、とろんとした眼差まなざしを向けてきた。

開港からこつち、どんどん情勢は悪くなるばかりで、すでに好転など望めないところまで、幕府は追い詰められているような気がするという。

酒を口に含むと、妙にがに苦く感じた。時局を読み、大きな普請があるかないか見込みが立てられなければ、多くの人夫を使う土工請負うけおいはすぐに口が干上ひあがる。常雇いの者も日銭ひせにが稼げない。おそらく、尾張屋ばかりでなく、森田屋も出雲屋も、清水屋も、幕府の状況が いいものでないと、気づいているだろう。

幕府は終わりと勝かつはいった。

尾張屋も酔いに任せてお上への不満と不安を口に出している。

いいや、と弥市は首を横に振る。

なにかが終われば、必ず始まりがある。

世が壊れたなら、直せばいい。おれたちは、壊れた家を、焼けた町を、建て直してきた。人の不幸で飯を食う生業なりわいだと卑下ひげする自分がまだ頭の隅すみにいる。が、終わったまま、壊れたままにしておいて

もいいとは決して思わない。

弥市はにっと口角こうかくを上げた。

「なにを四の五のおっしゃるやら。気弱な尾張屋さんなんざ見たくもねえ。まだ老ふけ込んでる場合じゃねえですよ。だいたい、人の手で作ったものは、いずれ必ず壊れるモンだ。そんなこと、もとは大工だった尾張屋さんなら、知っているはずじゃありませんか？」

「そうじゃない。政がめちやくちやだつてことがいいんだよ」  
「政も人が作ったものだ。だから壊れても不思議はねえんでしよう。ですが、めちやくちやがずっと続くはずはない。徳川さまがどうなるかしれませんが、焼け野原をそのままにはしておかない。また誰かが、きれいさっぱり片付けて、新たに土を入れて、固めて、新しい物を造るんです。土工も大工も、昔つからそうしてきたじゃねえですか。そうじゃありませんか。きっと政も同じなんでしょう」

尾張屋は、わずかに口を歪ゆがめたが、すぐに違ちがえねえ、と笑った。  
「開国したことを今更とやか*く*いっただと、仕方がねえ。政だと色々面倒なこともあるかもしれないが、異国を受け入れたってことは、こちらから打って出ることも出来るってことですよ。国こ中で小競り合こせいをしている場合じゃねえです。この日ひの本もとがすげえ国だと異国に知らしめればいいってことだ。それこそ、世の中の大普請が始まるかもしれねえ」

半分は勝の受け売りだ。

「はは、こいつはすげえ。お上の墓穴掘りの頃は、まだ若僧わかぞうだったくせに、生意気なまいきをいう口になったかよ」

酔いに濁った尾張屋の眼が優しく弥市に向けられる。

弥市は、自分の膳を脇わきに退けて、ぐっと身を乗り出した。

「尾張屋さんの望みはなんですか？」

「はあ？　なんでえ藪やぶから棒ぼうに。そんな青臭あおくせえ話はどうに忘れちまった」

尖とがった細い顎あごをしゃくった。

「まあ、せっかくの恵比寿講ですから。あつしも不惑ふわくを過ぎて、気が薄れたわけじゃねえのに——だからこそ苛いらついているのかも知れません。そこそこの稼業たつきで生計は立っておりますが、何やら物寂ものさびしくてならねえんです。だからといって、歳のせいにもしたくねえ、時勢のせいだと拗すねたくもねえ」

弥市の視線を逸そらせた尾張屋が、ふと口許くちもとを緩ゆるめた。

「おれが絵図面引ひいて、それをもとに材木すんがんたがを寸分違ちがわず切けって、削けずって、組み上げる。透すけるぐらいに薄い鉋屑かんなくす、ほぞがかっちり嵌はまる心地こちよさ。ぶん、と香なまる生木なまきの匂におもいい。左官ひだりに蔦つたに屋根葺ふき、色んな奴やつらの技わざが合わさって造り上げる。そいつは、何物にも代えがたい満足がある。やつぱり、おらあ、もと大工だからなあ、百年、



いや千年もそこに建っているような物を造りたいと思うねえ。京の都の神社仏閣みたいなモンだ。おれたちは宮大工じゃねえから、そんなご大層な物は手掛けられねえけど、孫子の代まで遺るような普請をしてみてえと、いまでも時折考える」

どこか照れ臭そうに尾張屋は話すと、おめえさんはどうなんだい？ と返してきた。

「おれは小売り商いから、土工請負人になったんで、大工の腕がねえのがちよいと悔しいんですがね。実家の親父から、算盤だけは叩き込まれて。普請の見積もりを出すのは誰よりうまいと思っております。ただ——」

弥市の脳裏のうりに勝の顔が浮かんだ。

「日の本のための普請が出来りやいいと」

「日の本のため？ そいつはたいしたもんだ。そうだな、品川と神奈川の台場にかかわってるしな。ああいう普請をまたしてえということかい？」

弥市は、いやその、と口籠くちこもる。

「なんだよ、おめえさんから、水を向けてきたんじゃねえか。もじもじしねえで、いってみな」

「笑わねえですか？」

尾張屋はむっと顎を引いて、唇を引き結ぶ。

弥市は、東海道を行く將軍上洛の行列を見た、と話した。三千人もの大行列は、通り過ぎるまでに日が暮れてしまうのではないかと  
思うほど長かった。

「それを家の中から眺めながら、思い出したことがありますね」  
神奈川宿で再会した勝から聞いた亜米利加国の土産話だ。蒸気車  
という鉄の道の上を走る鉄の車のことだ。

ぞろぞろ繋がる行列が、ふとそれと重なった。

いずれ、この日の本にも鉄の道が敷かれるかもしれないと勝はい  
つていた。

あのとときは、あまりに突飛すぎてよくわからなかった。だから、  
ただ呆気にとられ、なにも返すことが出来なかった。果たして、そ  
れがどういふものなのか弥市の頭ではとても追いつかなかったか  
らだ。駕籠や馬より速く、たくさんの人や荷を積んで走るといふ鉄  
の車——。

そのような話を、牡丹餅を食いながら聞かされても、さっぱりだ。  
楽しんでいたのは勝ばかりで、弥市は相槌を打つので精一杯だった。  
正直、勝が熱心に語れば語るほど、弥市は置いてけぼりを食った  
気分になっていた。

煙を吐きながら、海の上を渡る蒸気船が陸の上を行くようなもの  
なのか。

まことにそのようなことが出来るのか。

けれど、勝のいうように鉄の道が日の本にも敷かれたら、海路で運んでいた荷を、陸路でも運べるようになる。

数年前、真鶴沖で熱海の湯を運んでいた船が遭難し、四十両ほどであったが損失を出した。陸路で運ぶことが出来れば、そうしたこともなくなる。運搬を船に頼っている石や土もそうだ。人の移動も徒歩や駕籠、馬で数日掛けていたものが、あっという間になったら。このご大層なつやや恭しい行列もそうだ。鉄の車に皆乗せて運ぶことが出来るようになったら。

世の中はどれだけ変わるだろうか。

夢の鉄路だ。

異国では、すでに走っている、そう思うと急に胸が熱くなった。なにをみても面白く思えるガキじゃねえのに。四十を超えたい親爺が、と気恥ずかしく思えた。でかい土工仕事に胸を躍らせ、店が大きくなることに達成感も満足感も得ている。が、感覚が少し違う。チリチリとしたこそばゆさ。美人画を見て頭に血を上らせた十三、

四の頃のような心持ちに似ている。憧れ——だ。

「蒸気車を走らせてみたいと思います」

弥市が話し終えると、尾張屋は眼をパチクリさせた。

「まったく想像もつかねえや。蒸気船てのがあるから、陸を走る鉄

の荷車ってことかい？」

「おれにも、わかりません。大きさも、形もまったくわからない。どうやって造るかも知れません」

「鉄なら、鍛冶じやねえか。大工は役に立ちそうにもねえが」

と、清水屋と久治郎が銚子ちようしを手に提げさ、割り込んできた。

「やれやれ、万屋のご隠居は寝ちまうし、出雲屋の後継あとつぎは泣き出しちまうし。いま蒸気車つてのが聞こえてね、こつちのほうが面白そうだから、混ぜてくれ」

弥市は清水屋を仰ぎ見る。

「蒸気車のこと、知っているんですかい？」

ははは、と清水屋が笑いながら、どっかりと腰を下ろした。久治郎もその隣に座る。

「瓦版で見た」

弥市も尾張屋も思わず、ぽかんと口を開く。

「ペルリが日本に來た時に、色々土産を持ってきたろ？ それが瓦版になってな、そのひとつに蒸気車つてのがあったんだよ。先代がたまたまその瓦版を買ったんだ。はつきり覚えていないが、車のついた真かたまりつ黒な塊かたまりから煙が出て、屋形船やかたぶねみたいな物を引いている画えだった。こんな無骨ぶこつな物が異国じゃ走っているのか、粹じやねえと先代は馬鹿ばかにしていたが。まあ、おれもさほど興味を引かれなかつ

たなあ。ガキの玩具おもちゃにしか見えなかった」

「その瓦版、まだ残っていますか？」

弥市が勢い込むと、清水屋は、

「今更あんな物、見てどうすんだ。蔵くらの奥に仕舞い込んであるかもしれないが、探しておこうか？」

手酌てじやくで盃を満たして、呑み干した。

「いや、おれが探しますよ。近々伺うかがってもよろ——」

「旦那だんなさま、ちよいとすみません。たったいま、横浜の高島屋さんから遣いが来て」

常吉が少し青い顔をして、弥市の隣に膝を落とした。勢いを削そがれて、つい舌打ちした。常吉が手に文ふみを持っている。

「なんだえ、顔も見せねえ嘉右衛門さんが、どんな懸想文けそうぶみを寄越よこしたんだか」

弥市は皮肉を混ぜながら、文を受け取った。が、開いた途端、血の気が引けいた。

「な、なんだって」

思わず口にした弥市を、清水屋と尾張屋が見やる。

「高島屋から、港崎遊郭が燃えた、と」

賑にぎやかな宴が静まり返った。

朝五ツ（午前八時頃）、港崎遊郭近くの豚肉料理屋から火が出、遊

郭はもとより、居留地、日本人町まで類焼し、異人、日本人の火消が懸命に働けども、いまだ鎮火を見ず——と、弥市は読み上げた。

「おれの店は、おれの店は」

清水屋が血相けつそうを変える。

「そこまではわかりません。ただ、大火であることは間違いないでしょうが」

あげは。

弥市はいきなり座敷を飛び出し、足袋たびはだしのまま、表通りに走り出した。

「旦那、いくらなんでも横浜は見えやしませんよ」

常吉が叫びながら追って来た。

だが、弥市には、遠いはるか向こうの空が灰色おほに覆われている様子が見えるような気がした。

## 二

年が明け、慶応三年（一八六七）を迎えた。伊予松山松平家に年始に赴くも、殿さまも若殿も大坂へ出張でばしているとのことで、名札なふだだけを置いてきた。暮れに孝明天皇が崩御ほうごし、年があらたまるとすぐに、十六歳の若い皇子が即位した。

ますます世は混迷の色を深めていたが、日常は淡々と過ぎて行く。  
仲夏ちゅうか（陰曆五月）、弥市は増上寺ぞうじょうじにほど近い宇田川町うだがわちやうの青物、雜穀ざくを扱う店を丸々譲り受けた。表店おもてだなで間口まぐちも広い。いずれは雜穀だけに絞しぼって商いをしてもいいと思つたのだ。

この頃の時勢かんがを鑑みて、江戸を離れる商人が多くなつていた。世情の乱れが、不安や不満を増大させ、この頃は、夜盜ぼっこが跋扈し、おちおち夜道も歩けなくなつた。

この店も江戸が怖くなって逃げ出した口だ。

商売は養母が取り仕切り、お仲と、九歳になつた四男とくまつの徳松も同居している。店が軌道に乗るまでは、弥市も度々たびたび訪れ、泊まることもあつた。それに、愛宕あたごノ下の松山屋敷もこちらから通つたほうが近く、楽だということもある。

朝方ちゆうま、中吉ちゆうきちがやつて来た。

清水屋喜助から文が届いたという。

昨年、清水屋の蔵に出向いて、蒸気車の描かれているという瓦版を探したが、結局、見つからなかつた。弥市はそれから、会う人ごとに瓦版を持っていないか訊ねたが、やはりすでに十年以上前のもの。大事にしまっている者などいになかつた上に、そもそも知らない者のほうが多かつた。

中吉は、弥市に文を差し出し、その場で返事がほしいといった。

遣いの者が待つているという。弥市が文を開くと、明後日の都合を訊ねてあり、築地つきじで大普請がある。それとともに出来ないか、というものだった。日本橋室町むろまちの『百川ももかわ』で昼九ツ（正午頃）、とあった。百川といえば江戸屈指の料理屋だ。

大普請がなんであるのか記されていない。今のお上の状況では、新たな普請を起こすのは難しいが、幕府の御用を務めている清水屋だ。政情について、色々話を聞かせてもらうのもいいと、弥市はすぐに返書をしたため、中吉に渡した。

「いらっしやいませ」

店から軽やかな声かろがする。客となにを話しているのか、時折笑い声がする。

暖簾のれんを軽く押し分け、弥市は店を覗のぞき見る。

たすきと前垂まえだれを着けて、きびきびと立ち働いているのはお蝶ちやうだ。雑穀ますを升で計り、少し山盛りになってもそのまま麻袋に入れている。

「内緒ですよお。いつも来てくれるから」

そういうと、客は嬉うれしそうな顔をする。自分だけと思うからだ。しかし、それは養母も弥市も承知の上だ。お蝶にそういわせて、得意客を離さないためだ。

客が店を出ると、お蝶が弥市をみとめて、「弥市、あ、旦那さま」と頭を下げた。



猛火の中、無事に逃げおおせたあげはを弥市は身請けした。あげはを縛り付けていた岩亀楼は跡形なく燃えた。遊女四百人が死んだという。火事が収まってからすぐに弥市は横浜に赴いた。その惨状は眼を覆うばかりだった。焼け残った商家に身を寄せていたあげはを見つけた弥市は駆け寄り、人目も憚らず抱き締めた。

長屋に住まわせ、名を蝶と変えて、ここを譲り受けてから働かせるようにした。お仲はひとつ歳上のお蝶を「姉さま、姉さま」と呼んで慕っているが、父親の妾と知れたら大事になるだろう。その後ろめたさが、さらにお蝶へ向かってしまう。男はなんと浅はかで、情けない生き物であろうか。

いずれ、よい男と娶せ、この店を譲ってやるつもりでいた。遊郭で縛られ、妾として縛られては、可哀想だ。蝶は好きに羽ばたいてこそ美しいのだ。

「今晚、飯はおめえのところで食べるよ」

そういうと、お蝶は少しはにかみながら、頷いた。

銀鼠色の羽織を着けて、弥市は百川に向かった。

すでに座敷に待っていたのは、清水屋ともうひとり、四十がらみの男だ。

「築地に居留地が出来る。その前に、異人のための旅籠を造ること

になった。築地ホテル館というのだ」

膳が整うのも待てず、清水屋がいうと、傍そばに置かれていた絵図面を広げた。

この八月に着工予定だという。幕府主導ではあるが、幕府は土地を提供するだけで、普請ついでの費えは請負人が負担すると話した。

「その代わり、儲けはすべて請負人が得る。面白い話だろうか？ 株仲間を作って百両を一株として、出資した株数で利益を分配する。金を出せば誰でもいいというわけじゃないが、木場きばの鹿島屋かじまやにも声を掛けています。どうだろう、この話、乗っちゃくれないか？ おれは五株五百両加入するつもりだ」

幕府役人は、小栗上野介忠順おぐりこうすけのすけただまさという者らしい。そういえば、尾張屋がいつていた仏蘭西国から借金をしたという役人か。なるほど、口と算盤が達者なお役人に違いない。

この方法は、いわゆる社中、講中こうじゅうに近い。ただ、利益が出なければ、損をする。

「心配することはない。これは、英吉利国公使の申し入れを幕府が受けたのだ。江戸に異人が来ても、そこらの旅籠では都合が悪いだろう？ だから異人はホテルに泊まらざるを得ない。いつも満杯になる。試算では、一株の出資者には、年百両の利があると、小栗さまも申しておられる。ホテルが続く限り、懐ふところに入るのだぞ。こんな

儲け話はない。まあ、おれとしては、絵図面を引くのが垂米利加人だつてことが悔しいがね」

小栗が山師か、清水屋が山師か。

心の内で苦笑しつつ弥市は、その場では引き受けず、後日、森田屋と相談し、ホテル内外の壁の漆喰と、屋根瓦、築地川の浚いを請け、二株二百両、出資することを、清水屋に伝えた。

久しぶりの大仕事に、森田屋は小躍りし、弥市もすぐに職人、人夫の手配をした。

予定通り、八月から起工し、普請は順調に進んだ。

が、それから時をおかず、耳を疑うような出来事が起きた。京の二条城で、將軍慶喜が大政奉還の意向を表明したのだ。そして、二百五十年以上に亘った徳川の治世は終わった。

ホテルの普請場も大騒ぎになった。出資者は町人ではあるが、土地は幕府から借り受けている。このまま普請が中止されるのではないかと思われたが、清水屋や小栗との話し合いの結果、継続することになった。しかし、完成したところで、どうなるのか先行きが見通せぬまま、普請は続けられた。

吐く息が白い。

お蝶の家で長居をしてしまった。町木戸が閉まるまでには、芝の店に戻ろうと、提灯を提げ、弥市は足を速めた。表店の大戸はすで

に下ろされ、月も雲に隠れている。足許を照らすだけの明かりではどうにも心許ない。漂う気も重く沈んでいる。やはり駕籠を頼むべきだったか、それとも、宇田川町の店に泊まるべきだったかと、思いを巡らせながら、歩く。

ホテル普請は進んでいるが、株を買った者たちが不安を隠せず、連日、誰かしら、普請場を覗きに来た。その度に不満を洩らしていくのが鬱陶しいが、百両二百両の金子を出しているのだ、当然だ。しかも、職人や人夫たちの手間の払いにも滞りがあると聞いた。請負人の弥市や森田屋は自分が集めた者たちにはきちんと渡しているが、銭の支払いを渋る請負人がいると不平を洩らす職人もいた。経営は、百川に清水屋とともにいた男のようだが、この者がまったく姿を見せずにいるのが不満だった。

本音をいえば、もともと危なっかしい話ではある。百両出せば、毎年百両が得られるなど、どのように算盤を弾いたのか知りたいくらいだ。弥市は利益をあてにしていない。

山事と考えれば、損が出て諦められる。

誰よりも焦慮しているのは、おそらくこの普請を受けた清水屋であろう。

勝はどうしているだろう、と弥市は寒空に背中を丸めながら、思った。

予見通りになってしまったことを、どのように感じているのか。おそらく多忙を極めているだろう。会いに行ったところで、迷惑になる。なれど、あの優しそうな、屈託のない笑顔を見たくなる。勝にはたくさんの弟子がいるというが、飾らないあの笑顔に惹かれてしまうのではないかと思っただほどだ。

ようやく増上寺の大門に差し掛かった。広大な寺院は夜の帳に飲み込まれ、一層、闇が深く感じられた。と、

「ぎゃあああ」

突然、背後から男の悲鳴が聞こえた。

振り返ったが、暗闇が延びるばかりで、なにも見えない。ただ、わずかに赤い光が見えた。かなり遠くだ。提灯が燃え上がったのだろう。が、その光はすぐに消え失せ、再び墨を流したような闇が広がる。そういえば、「御用盗」と叫びながら、金品を強奪し、商家を襲っている一団がいるという噂があった。

そして、賊は町人ではなく武家の集団だと聞いた。

弥市は震え上がった。誰かが襲われたのかもしれない。斬り殺されたのか。心の臓の鼓動が速くなり、恐怖で喉から飛び出しそうなくらい激しい動悸を繰り返す。

いま、江戸の市中を取り締まっているのは、出羽庄内酒井家の藩士と幕府が組織した新徴組だ。その賊を捕まえるため、夜回りを強

化しているというが――。

からだ身体が固まって一步も足が出せなくなった。

ばたばたと走る音が近づいてくる。弥市はひとつ、提灯を吹き消して、路地に飛び込んで身体を屈めた。かが

次第に足音が近づいてくる。声はまったくしない。自分の息遣いだけが、聞こえる。

通りすぎてくれ、頼む。弥市は火の消えた提灯を抱え込んで祈った。

すぐそこまで来ている。足音はいくつだ。わからない。

弥市は家屋の壁に身体を押し付けた。すると、すぐ手前で足音が止まった。

「斬ったのか？」

くぐもった声でした。

「まさか。財布だけは盗ったがな。さて、今夜は三つしてのけた。屋敷に戻って、酒でも食らうか」

くつくつと嫌な笑い声でした。いや

「いつまで続けるのだ」

「まあ、ご命令には従わねばならん。これも大切なお役目だ」

「盗みが、か。武士も落ちたものだな」

声の違いからして、四人はいる。ただ、殺されていないことを知

つて安堵あんどした。走るのをやめた賊は、歩き出したようだ。話し声が  
少しずつ遠ざかっていく。

もう途切れ途切れにしか聞こえなかったが、弥市は耳にしたこと  
がある名が賊から出たことに愕然がくぜんとした。

確かに、サイゴウと聞こえた。薩摩の家中には西郷隆盛さいこうたかもりというお  
方がいる。もし、その人物だとしたら。御用盗を西郷隆盛が雇って  
いるのか？ なんのために。

弥市の総身あわだが粟立あわだった。

それからどう戻ったかも覚えていないが、母屋おもやの寝間ねまで眼を覚さま  
した。

しかも、きちんと夜具くるに包くまっている。

「旦那さま、お目覚めですか？」

障子の向こうで、常吉の声がした。返事をする、勢いよく障子  
が開け放たれ、常吉しちごろう、七五郎、中吉の三人が我先にと飛び込んでき  
た。

「ああ、よかった。昨夜は宇田川町にお泊まりとばかり思っていたいま  
したから」

年長の七五郎がほっとした顔をした。

「灯あかりも点つけずに戻られて。ともかく、瘡おこりのように身体を震わせ、  
顔はまるで幽鬼ゆうきのようによげっそりと青白く、ふらふら入って来たか

と思つたら、ばたりとお倒れになつたんでございますよ」

七五郎がさらに続けた。

「もう、私は生きた心地がしませんでしたよ。お内儀さんがお医者をお呼びとおっしゃったのですが、旦那さまはすうすうお眠りになられたので、大丈夫かと」

「いや、大袈裟おおげさにすることは無い。もうなんともないからね。安心しておくれ。富は？」

「お内儀さんもまだお休みです」

常吉が応えた。

そうか、そんなことがあつたのか。おそらく気が擦り減すつてしまつたのだろう。

「心配をかけてしまつたな」

「しかも今朝になつてから、驚いたのなんのつて、増上寺近くの、神明町しんめいちょうで商家のご隠居が例の御用盗に襲われて。峰打みねうちぢだったので、命は助かりましたが、肋骨あばらと右腕の骨が折られていたそう。先ほど、庄内藩の方がここにも来たのですよ。怪しい者を見なかつたかと。襲われた隠居は、町木戸が閉まる半刻はんせきほど前に出歩いていたというので、旦那さまがお戻りになつた時刻を思うと、恐ろしくて」

常吉が息をつかずに話した。

「その御用盗の賊なのですが、どうも逃げ込んだのが薩州屋敷だと



いうので。それが」

「常吉！」

弥市の厳しい声に、常吉は身を強張こわばらせた。

「いいか、そのこと口外こうがいするな。平野屋は薩州屋敷のお出入りなんだ。一切、口を噤つぶんで仕事に励め。七五郎、悪いが今日はお前が築地に行ってくれ。常吉と中吉は、いつも通り島津さまの御用を務める。池周りの修繕があるのだろうか？ いいな、これからも黙って事に精を出せばいい。さ、もう行っっていいぞ。あ、七五郎は残ってくれ」

寝間をあとにしたふたりの足音が遠ざかるのを見計らい、番頭の七五郎に向けて弥市は口を開いた。

「昨夜、その賊と出会った。おれは路地に隠れて、震えながら通りすぎるのをじっと待ったんだ。賊は四人で、薩摩なまりはなかったが、奴らの話の中にサイゴウと聞こえてな。途端に怖くなった。その方にはお会いしたことはないが、藩内では重要な人物だと、伊集院さまから伺ったことがある。御用盗がまことに薩摩の差し金で、その西郷が命じているのなら。なにを狙ねらっているのだろうか」

わかりかねます、と七五郎は首を横に振った。

「実は、昨日、柴田さまがおいでになりました」

聞けば、柴田は、借金の保証人を頼みに来たという。その額二千

両という大金ではあったが、松山藩からはわずかながらも扶持を得ているし、これまで稼がせてもらった恩がある。それは了解せねばならないだろう。

だが、話はそれだけではなかった。

「天朝さまを奉じた薩摩と長州は、お上の大政奉還では飽き足らず、新政府を打ち立て、武力で徳川を潰そうと考えているそうです。伊予松山藩は、徳川家御家門。当然、徳川を援護せねばならない。平野屋は、薩摩と松山とどちらにつくつもりかと、お訊ねになられ—  
—」

弥市は絶句した。薩摩と松山とどちらを選ぶか。どちらも店を鼻根にしてくれた。

一介の町人に、なにを選べというのだろう。江戸は將軍のお膝元。江戸っ子はそれが誇りでもあった。だとしたら、やはり徳川なのか？ しかし沼地に沈みかかっている徳川になんの益がある？ 新政府とやらを立ち上げた薩長のほうが、先行きは明るいのではないか？ 商売人として時局を見極め、時流に乗るのであれば、薩摩島津家だ。

だが、情でいえば、松山松平家かもしれない。殿さまや若殿にも目通りが叶い、直々に言葉を賜ったこともある。神奈川台場の築造の際には柴田とよく話をした。

ふたりで夜通し、台場の見積もりを出したことを思い出す。

一方、薩州屋敷では、今は国許に戻った伊集院が様々な仕事を平野屋に回してくれた。人夫たちが邸の庭で大喧嘩したときも、笑って許してくれたではないか。年の始めには、両藩屋敷ともに手斧始めを賜った。普請や工事が怪我なく事故なく無事に終えられるように願う儀式だ。

木遣り唄の中、横に倒した檜の柱の上で、手斧、墨壺などの大工道具を使う振りをする。

大工ではない弥市だったが、両藩ともに頭はお前なのだからと、他の出入りには任せなかった。薩摩とは十五年、松山とは十年の付き合いだ。

土工請負として大きくなれたのも、ふたつの藩のおかげだ。ありがたく思いこそすれ、どちらかを選ぶなどということは、やはり無理だ。

柴田の話では、倒幕を掲げた薩摩は武力を行使するという。戦が起きるといふことか？ この江戸も戦場になるのか——なぜ、そこまで。

御用盗の狼藉はさらに続いた。押し込み、つけ火、辻斬り。

弥市が窺った様子ではわずか四名ほどだったが、噂によると、五百ほどもいるという。そうでなければ、一日で、いくつも悪事を働

くことは出来ないだろう。

ただし、賊徒ぞくとが狙うのは、豪商や幕府の御用商人、あるいは徳川に与よする諸藩の武士だった。

数日後、庄内藩が江戸市中取締のために春日神社前かすがに置いていた屯所とんしよが、御用盗の一味に襲撃された。その者らが、薩州屋敷に逃げ込んだのを確かめ、度重なる盗み、騒乱は薩摩藩が関与していると断定した庄内藩が薩州屋敷を砲撃した。

その報は、宇田川町にいた弥市のもとに伝えられ、徳松を連れて、急ぎ芝の薩州屋敷へと向かった。

あたりは混乱していた。怒り狂った庄内藩士たちは「奸賊薩摩めかんぞくが」と声高こわたかに叫び、屋敷内になだれ込んだ。邸内を知っている弥市はいたたまれなくなった。庄内藩の報復を見越し、江戸で騒乱を起こして挑発まよほしたのだ。つまり、徳川を武力で叩く理由を薩摩に与えたのだ。

屋敷内には、顔見知りの薩摩藩士がいる。江戸詰めで日が浅い者は、薩摩なまりがきつく、早口で話されると首を傾かしげることも度々あった。それもいまでは互いに笑い話になっている。サイゴウという者がどれだけ偉いか知れないが、こうなることを見越していたとしたら、なんと酷薄こくはくな人物か。

冷たい地面から、寒さが足先を伝わって上がってくる。

野次馬に紛れて、その様子を眺めた弥市はなぜか涙を堪えることが出来なかった。屋敷内で奮戦し、斃れる薩摩藩士への憐憫か、それとも徳川を倒すために冷酷な手段も辞さないサイゴウへの憤りか。弥市は徳松の手を強く握った。

「お父つつあんは、このお屋敷が好きだった。ずいぶん世話になった。けどなあ——」

弥市は唇を噛み締める。

「こんな卑怯な真似はしちゃいけねえ。商売も同じだ。真っ正直にやったりや、馬鹿を見ることもある。けどなあ、騙し打ちはよくねえ。人さまに顔向け出来ねえような真似はするな。お天道さまの下を堂々と歩ける人になれ」

徳松は、ぼろぼろ涙を流す父親の顔を不思議そうに見上げていたが、やがて大きく頷いた。

### 三

薩州屋敷襲撃が契機となって、翌慶応四年（一八六八）一月、鳥羽伏見の戦が起こり、薩長を中心とする新政府軍に旧幕府軍は大敗した。将軍だった慶喜は朝敵となり追討令が出された。東征を続けた新政府軍に恐れをなした諸藩は次々恭順を示した。

薩摩藩士で大総督府参謀西郷隆盛と幕府軍事取扱となった勝海舟の会談により、江戸は戦火を免れた。恭順を示していた慶喜は水戸で謹慎、江戸城明け渡し、軍艦引き渡しなど新政府の提示した七つの条項を受諾。同年七月、江戸は東京と改称され、九月には明治と改元された。

戦はさらに奥羽、北陸に至り、翌年の北海道の五稜郭の戦いで、多くの命を犠牲にしてようやく終わった。

東京には、新政府の役人がどんどんやって来た。代わりにこれまで江戸にいた諸藩の者は、国許に戻ってしまった。徳川家は駿河へ転封となり、八百万石から七十万石に減封されたため、家臣たちは武士を捨てるか、新政府に雇われるか、駿府に行くかという選択を迫られ、旗本屋敷も空き家が見られ、広大な大名屋敷はもぬけの殻。江戸は約七割が武家地だった。そこに居住する者がいなくなれば、手入をされない建物は傷む。放っておけば、廃屋だらけの町が出来る。来上がる。

東の京とは名ばかりの有様だ。

土工や大工、職人は、災害で破壊された町を、古びた家屋を、新しく建て直し、再生する。

むろん、眼に見えるものだけじゃない。

長く続いた徳川の治世が旧いと、壊したのは新政府だ。めっちゃく

ちやになった政も町も、余計なものを取り除き、一度真っさらにして、新たに土を盛り、地を固め、屋台骨を組み上げる。

新政府にはその責務がある。

弥市は、愛宕ノ下の松山屋敷を訪れた。このあたりは、愛宕ノ下大名小路こうじと呼ばれて、各大名の上屋敷かみが建ち並ぶ。

屋敷の門は閉ざされていたが、果たして人の気配けはいはない。

薩摩の兵が江戸に迫ってきたとき、松山屋敷の家中の荷を預かったことを思い出す。そういえば、大名家が、皆こぞって国許に戻るとき、少しでも金を得ようと、書画じゆき、什器じゆきを売りに出した。どこの大名のものかはわからないが、弥市は女駕籠の飾り物や、金細工きんざいくの彫り物などを買って求めた。結局、横浜で異人に売ることにしたが、十五両ほど儲かった。まったく、おれも酷いひどことをしたものだと言った。

さて、築地へ行くか、と弥市は踵きびすを返した。

築地ホテル館の普請は続けられていた。やはり、金払いが滞っているようで、清水屋は自腹を切って工事を進めている。

が、諸藩に出入りをしてきた多くの職人たちは、武家がいなくなった東京で途方に暮れた。これから使われなくなった武家屋敷が壊されるか、改修されるはずだという見通しがあっても、それがいつになるかは皆目見当かいもくがつかない。

為政者が誰になろうとも、庶民は日々を暮らしていかねばならない。これまで仕事を得た先が失われたのだ。禄を食んでいた武家主家をなくして嘆いているが、それはこちらも変わりがない。

薩摩の伊集院が新政府の横浜建築掛惣裁に就任し、薩州屋敷出入りの者たちは、早速、まだ残暑厳しい中、横浜に出向き、祝いを兼ねて、仕事を求めた。

伊集院はその場で、久治郎と弥市ともうひとりの棟梁に残るようという、それぞれに通りの整備の仕事を与えた。さらに弥市は沼地への弁天社移築工事を落札した。

かなりの大仕事で、入札高は約五千五百両。当分はしのげると安堵した。

ところが、これが大きな損失を出した。連日四、五百人の人夫を出し、順調に沼地を埋め立て、十月からふた月かけて、六分通り出来上がった。しかし、何があったのか仕切り板が破れ、再び水が入り込み、もとの沼地に戻ってしまった。使った部材が泥にまみれ、あちらこちらに流れていた。

「申し訳ございません。おれが見過ごしたばかりに」  
常吉が弥市の足許に平伏したのを、

「てめえが差配しながら、なんてどじを踏みやがった！ 幾年おれのところにいやがる。仕切り板が緩んでいたのがわからなかったの



か！ どうしてくれるんだ。おめえのせいだ」

弥市は怒りに任せて常吉を怒鳴りつけ、足蹴あしげにした。

周りにいた人夫たちが眼を瞠みはる。

常吉は泥濘ぬかるみの中にひっくり返ったが、すぐに身を起こして、再び土下座どげざした。

顔の半分、身の半分が泥をかぶっていた。

「すみません、すみません」と繰り返し、常吉は嗚咽おえつを洩らし始めた。

結局すべてを一からやり直し、完成したのは年明けの四月だった。四百両の損高になった。

再び横浜と繋がり、伊集院の信頼を得て、請けた工事で大きなしくじりを犯した。

「伊集院さまに顔向けが出来ねえ」

東京に戻った弥市は、お蝶の所で三日三晩、ごろごろしながら弱音を吐き続けた。

「ご一新がなって明治になった。けど、おれは江戸の人間だ。新しい時代には用がねえ。もう潮時うしどしかもしれねえなあ」

お蝶の裾すそを割って、膝頭ひざがしらを撫なで回す。

「旦那さま、くすぐりたい。ほら、お昼にしましょう」

「まだ腹なんざ減ってねえよ」

弥市はお蝶の脚あしに頭を乗せて、指を内側に這はわせた。

泥だらけの常吉の姿を思い出す。横浜に残って伊集院のもとに連日通い詰めている。新たな入札があればすぐに飛脚ひきやくを立てるといった。勝手にしろ、と弥市はいい捨てた。

常吉を蹴り飛ばしたのは、己おのれに腹が立っていたのだ。以前だったら、常吉だけに任せず、自分も普請場を確認して回ったはずだ。それを怠おこたったのは、大きな仕事にありついてほっとしていたのと、埋め立てをいくつかやって来た自負があったからだ。

水もそうだが、土にも様々ある。砂状の土、粘り気けのある土、赤土、黒土。その土地になにがあったかでも土の性質が違いう。古いにしえに人が暮らしていたか、埋められた川や池があったか、掘ればどのような土地であるか土色でわかる。あの沼地は周囲に埋め立てに適した土がなかった。沼地の泥を乾かしたものを用いた。常吉が見過ごしたのじゃない。おれが土を見誤おとったのだ。常吉には申し訳ないことをした。

「土工仕事はやめて、商いは宇田川町の雑穀屋一本にするかな。それとも隠居して、もうちょっときれいな家を借りて、おめえと暮らすのもいいな」

身を起たち上げてお蝶を引き寄せると、眉まゆをひそめて弥市の手を払いのけた。

「なにするんだえ？」

「旦那さま、諦めるんですか？」

お蝶が立ち上がると、箆筒たんすの前に膝を落として、引き出しを開けた。

「これ」

差し出したのは、書物の『西洋事情 卷之一』だ。

数年前に書肆しよしで見つけた。西洋の様々な事柄を説明した物で、それには蒸気車の画えが載っていた。敷かれた二本の鉄の道の上に、煙をたなびかせながら黒い車が、数珠じゆず繋ぎの箱を引いている。この箱に人を入れて運ぶのだ。

想像だけであつた蒸気車が、弥市の中で形を成した瞬間だった。

「旦那さまは、これを造りたいっておっしゃっていたのに」

お蝶は少し寂しげにいう。

弥市は、息を吐いて、仰向けに転がると、天井てんじやうを見上げた。

「夢だよ、夢。そりゃあ、この国にもいつかは蒸気車が通るかも知れねえが、ずっと先のことだろうよ」

「それなら、旦那さまがお偉い人に掛け合えば。薩摩のお方とも仲良しなんだから」

「馬鹿いうな。ご一新がなつたばかりだ。新政府のお偉い人もあれやこれや整えるのに懸命だ。江戸、じゃねえ、東京だって作り直さ

なけりやいけねえ。そっちの方が先だろう」

「でも」

お蝶が拗ねたように、紅をさした唇を曲げた。

「いいんだよ。話は終わりだ。こっちへおいで」

呼んだが、お蝶は座敷を出て行き、

「ねえ、徳松さんが異人の言葉を話してたけど、ほら、横浜に行っていたから、覚えちゃまったのかしら？」

勝手から声を出した。まったく、と弥市は腕枕をして、ああ、と応えた。

「あつちでな、異国と色々話し合う役所で……外国官とかいったが、その役人と知り合ってた、これからは英語が話せるといいと助言を受けて、徳松に習わせることにしたんだよ」

「そうだったの。そうねえ、異人の言葉が話せるのはきつと役に立つわよ。片言でも遊郭じゃ重宝されたもの。客引の牛太郎とか」

「英語が話せる牛太郎がいたのかい？」

弥市は、横浜らしいな、と笑った。

久治郎が宇田川町の雑穀屋へ姿を見せた。

「沼地は大変だったね」

ああ、と弥市は茶を啜りながら頷いたが、その後の久治郎の話に

眼を見開いた。

「久治郎さん、そいつはまことかね？」

弥市は湯飲みを乱暴においた。湯飲みが転がり茶がこぼれたが、構わなかった。

「ああ、まこともまこと。こいつは、薩摩ひごしちざえもんの肥後七左衛門さまからのお話だ。ほら、恵比寿講のとき、弥市さん、蒸気車のことを話していたろう？ これはもう、弥市さんに話を持ってこなきや、七代ただ崇られると思つたよ。だから、一刻も早く伝えたくて、ともかく飛んできた」

久治郎もどこか高揚こうようしていた。

「それで、蒸気車はどこを走るんだ？」

弥市は身を乗り出した。

「東京から横浜だ。掛かりを務めるのは肥後さまでな、それで、おれたちに話を回してくれたんだよ。肥後さまに、弥市さんのことを話すと、それはいい、と。これはもうふたりに頼むしかない。起工は、来年の三月。それまでに、もつと詳くわしいことがわかるはずだが、肥後さまは、大仕事だから、すぐに工部省に願ひ出るようにとおっしゃられた」

弥市は、静かに頷いた。言葉が出てこない。おれが蒸気車を通すための、その土工たずまとして携たずまわれるのか。胸が締め付けられる思いが

した。

「東京と横浜を繋ぐのか……それは、なんとも」

「肥後さまもかなり力が入っておられた。この日の本に初めて鉄の道が敷かれるのだ。蒸気車は、近代日本の象徴になる、そういって泡を飛ばすほどにな。弥市さんより歳は下だが、おれはもう四十半しじゅうなかばだ。隠居がちらつく歳だよ。けど、日本初だの、近代日本の象徴だのといわれたら、気持ちたかぶが昂るってもんだ」

この日の本で最初の蒸気車が東京と横浜を走る。近代日本の象徴

勝の言葉がよみがえ甦る。日の本のための仕事。まさにこれが、その仕事ではあるまいか。

画で見た蒸気車が浮かんできた。いや、もう画を眺めることはない。あと数年したら、本物がこの国を走るのだ。

詞書ことばがきには、轟音ごうおんだと記されていたが、どんな音がするのか。耳をふさぐほどなのか？ 車から吐く煙はどんな匂いがするのだろうか。どれだけ速く進むのか。景色はどう見えるのだろうか。なにからなにまで、知りたくなる。

「あれ？ まさかとは思いますが都合が悪いつてことはありませんよね。何か別の仕事が決まっちゃまっているなんてことは」

久治郎が探るように顔を突き出した。

弥市は慌あわてて首を横に振る。

「いやいや、違うんだ。呆あっけ気に取られちまって。いやそうじゃない」  
嬉しすぎて言葉が見つからなくなってしまったっていうのが、本当かもしれない、と弥市はいつた。なにやら、妙に込み上げてくる。胸が詰まり、鼻の奥が痛んだ。

「久治郎さん。かたじけねえ。あんな席でのことを覚えていてくれてたなんて」

弥市は感極かんきょくまって、思わず久治郎の手を取り、堅く握り締めた。  
「お、おう。なんだ、その蒸気車ってヤツを一緒に通そうじゃねえか」

久治郎の掌てのひらの厚さを感じつつ、握ったその手を弥市は己ひたいの額に押し当てた。

無事に届けは受理され、久治郎と弥市は東京の鉄路敷設ふせつを正式に請け負うことになった。ふたりは肥後ほんじよを本所の料理屋に招いた。

肥後は約束通り、座敷へ入ってくると、

「久しぶりだな、平野屋。息災か」

弥市を見るなり相好そうごうを崩した。目尻に幾本もの皺しわが浮く。が、弥市より十近くも上には見えなかった。鬚まげは結っているが、洋装で現れた。洋装だと若く見えるのだろうかと思つて、

「この度は、まことにかたじけのうございます」

弥市は隣に座る久治郎とともに深々と頭を下げた。

「うむ。安達屋から聞かせてもらったが、まさか蒸気車に興味があったとは思わなんだ。そういう者に仕事を任せられるのは、頼もしく思う」

「恐れ入ります。本日は、伊集院さまにもお声をおかけいたしましたのですが、さすがに横浜から出てくるのは骨が折れると。まことに残念だとして丁寧な書状をいただきましてございます」

そうか、私も会いたかったが、と肥後が上座に腰を下ろした。

「平野屋、だいぶ白髪しろがが増えたな。ご一新はお前たち出入りの者たちにも心配をかけた。先行きが不安であつたらうが、こうして再び、ともに仕事ができることを嬉しく思う」

「勿体もったいない。確かに、あの当時は連日、肝きもが冷えました。刻一刻と情勢が変わるものですから。特に総攻撃の際には、どこへ逃げようかと慌てふためいております」

「ははは、それは心配をかけた」

楽しそうに肥後が笑う。こちらとしては笑い事ではなかったのだが。

三月十五日の総攻撃は中止されたが、五月半ばに、幕臣うえのかんえいじやら浪人者しやうぎたいやら、町人までもが集まった彰義隊と新政府軍が上野寛永寺で衝



突した。半日で勝敗は決したが、寛永寺は砲弾と小銃を浴び、残った堂宇はわずかで、境内には二百を超える隊士の亡骸が転がっていた。遺骸はしばらくそのままにされ、あまりの惨たらしさに、江戸の庶民は皆、悔し涙を流した。

「江戸の民は、我らをいまだ憎んでおろうが、新しい世のためだ。我が国は、産業、工業、政治、経済、医学、学問に至るまで欧米諸国に遅れを取っている。このままでは異国に飲み込まれ、属国になり得ることもあった。西洋に追いつくためには、異国を受け入れ、新しい知識を吸収することが必要だったのだ。徳川の幕藩体制のもとは一枚岩にはなりにくい。だからこそ天皇を戴き、世子世襲ではない政府を作り上げたのだ。もう武士はおらん、身分もない。ただし、我らは、日本国を思い、義をもってご一新に臨んだ。恨んでくれるな」

肥後は諭すようにいい、弥市と久治郎に頷いた。

「恐れ入ります。肥後さま、薩摩の方々が中心となって立ち上げた新政府でございます。これからより良い世の中を作っていただければ、ありがたいことでございます」

「どうも皮肉にも聞こえるがな、平野屋。そうか、お前は、松山屋敷の出入りでもあったな。その心情は察するにあまりある」

「とんでもないことでございます」

そう答えたものの、倒幕の狼煙のろしが上がってから苦悩したのは確かだ。薩摩のやり方に憤っていたこともある。

慶応四年の二月だった。

弥市は、松山家中の柴田才治郎に呼ばれ、屋敷へと出向いた。松山侯の奥方がいる目黒の屋敷を守ってくれるよう懇願された。

「お前は、薩州屋敷の出入りだ。これは殿の頼みなのだ。どうか、薩摩の者に申し入れてくれ。これを最後の仕事として請け負ってくれまいか」

柴田が頭を下げた。

「おやめくださいまし。これまで、私がどれほど、松山侯に恩義を感じているか。請負人としてやってこられたのも松山屋敷のお出入りになり、扶持をいただいていたからです。それに、私の四男の徳松の松の字は松山藩から拝借したものでございますよ」

薩摩がわからない。徳川についていたかと思えば、いつの間にか長州と手を結んでいた。御用盗騒ぎ、その後の焼き討ちの際の、自藩の者を駒のように扱った慈悲のなさ。薩州屋敷にも人物はいいた。よい仕事をさせてくれたのも確かだ。

「しかしな、今般こんぱんの状況を考えろ。もう徳川に勝ち目はないのだ。様々思いはあろうが、お前は薩摩を選べ。商人であろう。利のあるほうを選んだとて誰も咎とがめはせぬ」

「ですが、私に出来ることがあれば」

「だから、今申したではないか。奥方さまをお守りしてくれ」

柴田はわずかに微笑ほほえんだ。

「神奈川台場は大変だったが、楽しかった。勝どのと知り合えたことも含めてな。あのような時が過ぎせることはもうないだろう。弥市、生きておれば、また会えよう。これまでよく努めてくれた」

柴田は最後に、もう一度、奥方さまを頼むといって、身を翻ひるがえした。

弥市は柴田が立ち去った後も動けずにいた。世の流れとはいえ、辛かった。ひとり残された弥市は、両の手をつき、深々と頭を下げた。

薩摩兵が駐屯ちゆうとんしている瑞聖寺ずいしようじに出向き、伊集院に松山侯の願いを聞き入れてくれるよう頼んだ。

伊集院は、承知したと大きく頷いた。弥市の立場を考えてくれたのだろう。

柴田にはあれ以降、会うことはなかったが、生きていることを信じている。

「色々とございましたが、ともかく此度こたびの蒸気車の大事な、精一杯務めさせていただきます」

弥市は姿勢を正した。久治郎が銚子を提げて、膝を進めた。

「さ、肥後さま。まずは一献。弥市いっぺんさんも盃を」

肥後が盃を傾け、久治郎と弥市もそれに続いた。

「ところで、平野屋。お前は、蒸気車について詳しいようだな」

「いえ、詳しいわけではありません。あるお方よりお話を伺ってから、どうにも気になってならなかったのです。そのお方があまりに熱っぽく語るものですから、どんなものであるかと。もしも、その方という通り、蒸気車が走る世になったなら、私らの仕事も格段に早くなるのではないかと思いましたよ。苦労して半ば命懸けで運んでいた土も石も、材木も。人もそうでしょう。私は東京と横浜の行き来をしておりますが、蒸気車だったらどんなに楽だろうと」

「なるほど。平野屋のような者なら、商いに利用出来ると考えられるのだなあ。そういう長所を見つけてくれるとよいが、そうとばかりは限らないのでな」

と、肥後はわずかに口籠もった。

「なにか？」と、久治郎が問う。

「鉄路の敷設については、政府内でもなかなか理解が得られなかった。特に反対していたのが、兵部省ひょうぶしょうだな。異国に対しての軍備を充実させることが急務だというわけだ。鉄路を敷けば、平野屋がいうように、物資の輸送が格段に簡便化する。しかし、居留地の外国人までもが容易たやすく移動出来るようになる。それが、どのような影響

を国内に及ぼすのか危惧きぐしている。それに加えて、政府内でも、異国の物を次々取り入れればよいわけではないという意見がいまだにある」

それだな、と肥後は急に声を落とした。

「此度の鉄路敷設は、決定ではない」

弥市と久治郎は顔を見合わせた。

「ですが、請負の届けは受理されているのでしょうか？」

久治郎が困惑した表情で訊ねる。

「うむ。しかし、廟議びやうぎ決定は得ていない。あくまでも予定だ。それゆえ、口外無用だ。しかし、この事業を推し進めているのは、民部大輔たいふを務める大隈重信公と大蔵少輔ししょうを務める伊藤博文公のおふたりだ。英吉利国公使のパークスどのより、蒸気車の必要性も説かれている。このお二方ならば、必ず蒸気車を日本に走らせる」

大隈は旧佐賀藩士。旧藩主の鍋島直正なべしまなおまさは、早くから蒸気機関に興味を示し、蒸気車の模型を作らせるほどだった。それもあり、大隈も蒸気車の利便性を考えており、旧長州藩士の伊藤博文は、江戸幕府が海外渡航を解禁する前に、英吉利国へ四名の藩士とともに密航。蒸気車を目の当りにしている。そのときの密航者のひとりである井上勝いのうえ かつは伊藤邸に寄宿しており、その井上から鉄路を敷くのはどうかと提案されたのだという。

新政府は、民にわかりやすく、より強烈な印象を与えられる国家  
主導の一大事業を模索している最中だった。いまだ、民の信用が薄  
く、特に東京では、西国から我が物顔でずかずか乗り込んで来た  
田舎者いなかもという見方をされ、京では、江戸を東京として都を移したこ  
とに不満を持たれていた。

それらを懐柔かいじゆうするためにも、より鮮烈せんれつな、まさに近代日本を象徴  
する物として、蒸気車はうってつけだと睨んだのだ。

物資の輸送、人の移動、時間の短縮。

産業、経済を発展させるだけの長所はいくらでもある。

現に、英吉利国の国力は、蒸気車が稼動かどうして以降、劇的に増加し  
ている。

新政府は、関所を廃し、居住、移動、商売の制限もなくなってい  
た。だが、移動の手立ては、徒歩か馬、船と、旧来と変わることが  
ない。

そこに、蒸気車を導入すれば、驚くのはもちろんだが、暮らしが  
豊かに、便利になることを民が実感することが出来る。そして、こ  
れまでは各藩の領地として分断されていたが、くまなく鉄路を通す  
ことにより、日本全土が繋がる。

肥後の話を聞くにつれて、弥市は必ずや実現するだろうと確信し  
た。

「けど、鐵路つてのは、どうやって敷くんでしょね。蒸気車も日本の本にはないですし、鐵路というからには、鉄の長い棒を敷いていくんでしょが、そんな物もどうやって造るのか」

久治郎が首を傾げた。

肥後が笑う。

「もちろん、蒸気車など見た者はこの日本にはほんの一握り。誰も知らないといってもいいだろう。そこはだな、異人の職人を我が国に招くことになる。お雇い外国人ということだな。蒸気車を動かす者も異人になるだろうが」

久治郎は得心した顔で幾度も首を縦に振る。

「これは、表立ったものではないが、この冬に新政府の高官と公使のパークスが会うことになっている。通詞を務めるのは、井上勝だということだ。そこで正式に決定すれば、すぐに起工することになる。まずは、土工の平野屋、お前の出番だ」

「はい」

「必ず、決まる。吉報をしばし待て。お前たちは、日本初の鐵路を敷く職人になる」

肥後の力の籠もった声に、弥市は思わず武者震いした。

(つづく)